

# 故事成語の世界へようこそ

岩崎 瞳 仲嶺 幸江  
塩川 紗代

## 一 はじめに

四年生三名、一年生二名の構成で、今年度の漢文ゼミは発足した。毎週水曜日、谷中先生の研究室で、決めたテキストを各自調べて発表というスタイルは前年度から踏襲。ただ今年度は、『孫子』『論語』とかたいテキスト続きだったこともあり、一年生がとつきやすいテキストにしようと言うことになった。

そこで目をつけたのが故事成語である。

故事成語の中には、「矛盾」「破天荒」など、いまでも日常会話に使える言葉が多い。一方、そうした言葉が故事成語であることを知らない人もいるだろう。中国由来の故事成語は、日本語に溶け込んでいると言っても過言ではない。

では、「故事成語」がどのようにして伝わったか、ご存知だろうか。

今年度、漢文ゼミが使用したテキスト『蒙求』<sup>（1）</sup>は、日本に故事成語を伝えた書物の一つである。南北朝までの故事を唐の李瀚<sup>（2）</sup>が著し、日本に伝わったのは平安時代。目次を見渡せば、その数、実に五百九十六句。句それぞれに故事がつくのだから、かなりの量だ。

当然、すべての句を網羅しようとするば途方もない時間がかかる。そこで漢文ゼミでは、毎週の活動時間までに、各自適当な句を調べてくる

といういわば「いいとこ取り」。今回のレポート作成にあたって、基本はその発表がもとになっている。

意外と知らない故事成語。その広大な世界に興味を抱くきっかけになれば幸いである。

## 二 庶女振風

『蒙求』にある「庶女振風」では、自然と人事とは感應するという「天人相関」についての話が述べられている。

庶女告天、雷電下撃、景公臺隕、支體傷折、海水大出。（中略）女殺母以誣。婦不能自明、冤結告天。<sup>（1）</sup>

〈無実の罪で死んだ斉国の庶民の女の怨霊が天神に訴えた。そのため、雷鳴電光がして落雷があった。景公は驚いて台より落ち、手足は傷つき折れ、海水は溢れて津波が起こった、と。（中略）姑殺しという無実の罪に陥った怨霊が鬱結して天に告げたために、本文にあるような変事が生じたのである、と。〉<sup>（2）</sup>

無実の罪で死んだ女の怨霊が気が晴れないで、ふさぎこみ、天に告げると変事が起こる話は、一見、ばかばかしいような気もする。しかし、

私達が現在使っている人と自然とが感応しあうという意味を含んだ言い回しや、人と氣とが影響しあうという考え方は、確かに存在する。

例えば「あなたが勉強するなんて、今日は雪でも降るんじゃない」という言い回しや、季節の変わり目には風邪などをひきやすいというのもその一例であり、この考え方に由来している。また物語の中でも、人間が喜ぶと、温かい風が吹いたり、怒ると雷が鳴ってひどい豪雨になったりと、感情によって、自然が変化するという場面も珍しくない。

これとまた同様の話が『淮南子』<sup>（えなんし）</sup>にもある。『淮南子』覽冥訓<sup>（らんめいくん）</sup>には、

專精厲意、委務積神、上通九天、激厲至精<sup>（3）</sup>

〈誠心誠意、心を專一にして事に当たれば、そのまことは天に通じ、天もその至精（誠）をゆり動かすものである〉<sup>（4）</sup>

と述べられており、人の誠心と天（ここでは自然の意）という、一見無関係と思われるものも、同類は互いに感応し合うということが記されている。

人間と自然という関係でなくとも、影響しあうという観点から見れば「病は氣から」という日本のことわざも似たような意味を持っているのではないだろうか。このことわざは「病氣は氣持ちの持ち方次第で悪くもなり、良くもなる」という意味を持つ。ここでいう「氣」とは「生命の原動力となる勢い、活力の源」という意味で、この「氣」というものが体を循環していて、その持ち方次第で、物事の良し悪しを左右するという考え方であり、ここでは氣と人（体）とが相互に影響しあっているとする考え方が存在する。

本文にあるような内容はたとえ話でしかないものの、確かに、天氣が良ければ人の氣持ちも晴れるし、悪ければ自然と氣持ちも暗くなる。今回この言葉について熟考してみても、自然と人間との関係を改めて実感させられた。

### 三 杜周深刻<sup>（としゅう）</sup>

我々が暮らしている今現在、日本は憲法をはじめとする法律によって治められている。そして、法律や憲法を遵守している裁判官は己の良心に基づき裁判を行うが国からの圧力を受けない、ということになっている。今現在の憲法や法律の良し悪しは別として、これは、憲法や法律を重視していると言えるだろう。

ここで少し考えてみて欲しい。昔、中国から日本に律令が伝わったことからわかるように、そこには法律があった。しかし、それだけで国が統治されているわけではなかった。皇帝もまた、国を治めていたのだ。杜周深刻<sup>（としゅう）</sup>というのは、そんな時代の話である。

前漢の時代に杜周という人がいた。杜周は残酷で、法を運用することに対してとても厳しい人だった。けれどもその法律の運用の仕方は、法文を都合の良いように解釈するというものだった。武帝が許そうとする者は無実の罪であることにし、武帝が気に入らないで罪に落そうと思う者は直ちに罪に陥れる、といった具合に。そんな杜周に対してある人が杜周にこう訊ねた。

君天下の爲に決平し、三尺の法に循<sup>（したが）</sup>はず、専ら人主の意指を以て獄を爲<sup>（な）</sup>む。

「君は天下のために公平に罰を決断すべき任にありながら法律に従わず、専ら人主の意向に従って獄を治めるとはどうしたことか」

それに対して杜周の言った言葉。

三尺は安く<sup>い</sup>より出づるか。前主の是とする所著して律と爲し、後主の是とする所、疏して令と爲す。時に當るを是と爲す。何ぞ古の法あらんや

「君は法律に従うべきだというのが、その法律はどこから出てくると思ふか。前代の人主の是とする所より是と定まったもの、これが法令である。どうして昔から定まった法があるのか」

そして杜周は武帝に私心をはさまぬ者であると氣に入られ、出世をした。

私は最初にこの文章を読んで、昭和天皇が昔、諸外国からエンペラー裕仁と呼ばれていた時ことを思い出した。天皇が権力を持っていた時代の、少し前の日本の憲法であった大日本帝国憲法が、人の人権などほとんど認めていなかったことを。昔は私たちが想像もつかないような、とても強い権力を、一国の主は持っていたのだ。

だから一国の主は法律に治められる対象になりうるのか、ということとは昔から言われていた。時代によって人々が思い、考えることは、当たり前だけれども、変わる。だから民主主義ではない、一人の王が国を治めていたこの時代に、前の王が作ったのと同じ法をずっと使っていくことに疑問をもつ人がいてもおかしくない。たとえば、イギリスではブラ

クトン<sup>6</sup>が「国王といえども神と法の下にある」と主張したが、それが実現することは長い間なかった。

杜周の言葉は、そういう意味で受け取るとき、教えられることがある。けれども、杜周の場合は法律を重要視しなければならぬ役職にいなから法律を無視し、武帝の意のままに刑罰を下したから批判をされたのだろう。本当に杜周がすべきだったのは武帝が思うがままに刑罰を与えるのではなくて、武帝に新しい法律の制作をさせ、新しい秩序を作るように進言すべきだったのだ。

また、同じように今日の日本について考えてみた時、少し疑問に思うことがある。日本国憲法は制定されてから今まで、一度も変わったことがない。それを私たちは当たり前のように受け止めている。しかし、制定以来一度も変わったことがない憲法など、先進国の中でも日本だけであるということを知っている人はどれくらいいるのだろうか。憲法を変えろと言いたいわけではないが、憲法作成当時と今では色々と状況が違いうのだから、一部分でも変わっていてもおかしくないし、変わっていないのに今でも使えているということ、私は不思議に思う。

#### 四 おわりに

近年、中学高校の教育課程における「漢文離れ」が指摘されている。思うに、返り点であったり、読み癖であったり、書き下しの際の助詞・助動詞判別であったりと、漢文学習にはとかく難しい印象が付きまとう。しかもどれも、必ず「正答」があり、記述のように解釈の余地から点数を融通してもらおう荒業もできない。

だが漢文ゼミの活動は、正答を見つけないことではない。「自答」を考え出すことにあると、四年間の自主ゼミ活動を通して私は思う。

使用する資料の現代語訳から読み始めても大丈夫。配布した資料に誤字があらうと、みんな笑ってもしくは無言で修正していく。大切なのは、たとえば、自分が気になった文句に、漢字一つの意味から、章全体の意味までふまえた上で、自分がこれだと思う解釈を考える、そうした行為にあると思う。

もちろん、返り点や読み癖、助詞・助動詞も、わかっていることに越したことはない。しかしそれらは、意気込み次第でいつでも学べる。だが自答は、時々によって変化していく。大学時代の自答は、今しか作れない。

今回のレポートの中心執筆者は一年生二人だ。大学に入学してからまだ片手で数えられるほどしか書いていないレポートの一つが、研究ノートに載って確実に残る。三年後の彼女たちがこのレポートを読み返したとき、どんな感想が浮かぶのだろう。

別の自答ができているかもしれないし、もっと深く考察された自答ができているかもしれない。

とはいえどんな形であれ、漢文ゼミが残っていることを切に願わずにはいられない。

## 注

(1)(2)(5)『蒙求』本文・書き下し文・訳文については、早川光三郎著『新釈漢文大系 蒙求上』による。

(3)(4)『淮南子』本文・訳文については、楠山春樹著『新釈漢文大系 淮南子上』による。

(6) ヘンリー・ブラクトン。十三世紀イギリスの聖職者、裁判官。

## 参考文献

楠山春樹著『新釈漢文大系 淮南子上』明治書院（昭和五十四年八月）  
早川光三郎著『新釈漢文大系 蒙求上』明治書院（昭和四十八年八月）